韓国語話者と中国語話者の指示詞「ソ⇔ア」の誤用
－「共有知識とは何か」という観点から－

Errors using Japanese demonstratives *so* and *a* made by Korean and Chinese learners, considered from the viewpoint of "shared knowledge between interlocutors"

金井勇人 [i]

KANAI Hayato

（要旨）

本稿では、韓国語・中国語を母語とする日本語学習者の、文脈指示におけるソ系とア系との誤用を、母語からの転移という観点から考察する。すなわち、日本語のソ系とア系がカバーする範囲を、韓国語ではコ(ku)系のみ、中国語では「那」系のみでカバーしているわけだが、このことがソ系とア系の誤用の一因であると考えられる。本稿では、ここには「日本語における共有知識とは何か」という問題が潜んでいるものと考える。「共有知識」への理解が不十分な学習者が、ソ系とア系を混用してしまうのである。そこで本稿では、母語からの転移と「共有知識」とを中心に、このタイプの誤用を分析した。それに加えて「共有知識」に重点を置いた「解説」を作成して、この「解説」後の指示詞の穴埋めテストでは、正答率が高まることを示した。このことから、適切な「解説」を提示することで、このタイプの「ソ⇔ア」の誤用は、かなりの割合で防げる、ということが分かった。

キーワード：日韓中対照、指示詞（ソ系とア系）、誤用分析、母語からの転移、共有知識、誤用を防ぐための解説

1. はじめに

本稿は、韓国語と中国語を母語とする日本語学習者の、文脈指示における指示詞「ソ⇔ア」の誤用を分析するものである。[ii] 具体的には「そのN」と「あのN」という名詞修飾を取り上げる（話し言葉を考察対象とする）。

(1) 私の友だちは、とてもストレスがたまっています。*あの友だちはストレスがたまると、運動の

---

[i] 埼玉大学日本語教育センター准教授。本稿の執筆にあたっては、新城直樹（琉球大学）、金善花（関東学園大学）、佐藤有紀（関東学園大学）、張瑞豊（埼玉大学大学院文化科学研究科修士課程修了生）の各氏に多大な協力をいただきました。記して謝意を表します。

[ii] 本稿ではア系による「記憶指示」を文脈指示に分類するが、これは便宜上である。

記憶指示一般について言えば、現に眼前に存在する対象ではないので、直示的である必然性はないが、記憶内の場面を眼前の状況と同等に扱えば、直示と同じ方法によって記憶内の要素を指示することも可能なはずである。アの記憶指示用法とは、このような拡張的な直示によるものと考えることができる。（中略）一般に、アの文脈照応用法と呼ばれるものは、すべてこの記憶指示用法である。（金水 1999:72）

ために、アパートの階段を上ったり下りたりしています。

（留学生の作文。波線は先行詞、下線は指示詞）

このようなソ系とア系の誤用は、上級の日本語学習者でも非常に多い。

本稿の特色は２つある。１つめは、韓国語・中国語の話者には、前方照応と記憶指示の使い分けの理解が難しいことを、母語転移の観点（共有知識への理解）から分析することである。２つめは、このタイプの誤用を防ぐための「解説」を作成して、「解説」の前後で２回アンケートを実施し、「解説」後の正答率が上がること、すなわち「解説」の有効性を示すことである。

2. 先行研究

指示詞（ソ系とア系の文脈指示）の誤用の原因については、大きく分けて連結する名詞のタイプによるとする考え方と、母語からの転移を原因とする考え方が存在する。まず前者として、迫田(1998)を挙げたい。

(2) 日本語学習者がソ系とア系指示詞と名詞の結合において、抽象名詞にはソ系指示詞を、具体名詞にはア系指示詞を、といった特定の種類の名詞との組み合わせでパターンを作ることを「ソ系とア系指示詞のパターン形成」と呼ぶ。（迫田 1998:196）

このことは「つまり、彼ら（引用者注；日本語学習者）は「あの人」「あの先生」「そんなこと」などの固まり（ユニット）で覚えて、使っている可能性が高い（迫田 2011:28）」ということを意味する。

本稿では、こうした考え方を否定はしない。[iii] 誤用の原因は単一ではなく、複合的なものだと思われるからである。次に後者として、韓国語話者の誤用について論じた安(1996)を挙げたい。

(3) 日本語の「ソ」系と「ア」系は韓国語の「ユ」系（日本語の「ソ」系に当たる）１つでカバーしているため、日本語のほうが用法が複雑である。（安 1996:4）

ただし同時に、安(1996)は「対照分析の重要さを認める一方で、さらに、各学習段階における学習状況とその変化についても調査する必要があると考える（安 1996:2）」とも述べていて、中間言語の分析を否定してはいない。後者の立場を採る本稿のスタンスも、これと同様である。

確かに迫田(2002:88-90)が指摘するように、ある誤用が母語からの転移であるかどうかを（客観的に）判定するのは困難だろう。しかし筆者は、言語学・日本語学を専攻する韓国語話者・中国語話者の大学院生と話し合いを重ねるうち、やはり母語からの転移を否定できない、と考えるに至った。

中でも、母語からの転移に起因する「共有知識」に対する理解の不十分さが、前方照応と記憶指示の境界を曖昧にして、その結果、ソ系とア系の誤用が起きるものと考える。本稿では、そうした観点から分析を行い、かつどのような「解説」を提示すれば、そうした誤用を防げるのか、を考察する。

「ソ⇔ア」の誤用についての論考は少なくないが、上記２点（母語からの転移・どのように「解説」すれば誤用を防げるか）を焦点化したところに、本稿のオリジナリティがある。

[iii] 後に見るアンケートの結果で同タイプの設問でも正答率が異なるのは、この「パターン形成」の問題が関係しているのかもしれない。本稿では、この問題には踏み込まない。

3. 韓国語および中国語の指示詞

3.1. 韓国語の指示詞

韓国語は「이(i)」「그(ku)」「저(ce)」という３系列の指示詞を持つ。

現場指示の距離区分型では、それぞれ［近］［中］［遠］という素性を持ち、ほぼコ系＝이(i)系、ソ系＝그(ku)系、ア系＝저(ce)系と対応する。したがって、日本語の指示詞（コソア）と、おおむね同様である。

また、現場指示の人称区分型では、話し手の領域は이(i)系、聞き手の領域は그(ku)系で指すので、コ系＝이(i)系、ソ系＝그(ku)系という対応であり、こちらも日本語の指示詞（コソ）と、おおむね同様である。

さらなる詳細については、金(2006)などを参照されたい。

次に、本稿で取り上げる文脈指示について見てみたい。

(4)　저 의 친구 는 스트레스 가 아주　많습니다.
(私 の 友だち は ストレス　が 非常に　多い)
이／그／*저　친구　는 스트레스 가 쌓이면　아빠트 의 계단
(この／その／*あの 友だち は　ストレス　が たまると アパート の 階段
을 오르락 내리락 하며 운동 을 합니다.
を 上り　　下り　　して　運動　を しています)

第２文において、第１文に現れる「友だち」を指示するとき、韓国語では이(i)系および그(ku)系を使える。これは、日本語でコ系およびソ系を使えることと同じである。そして이(i)系を使うと、日本語のコ系と同様、直示的なニュアンスを帯びる。一方、그(ku)系を使うと、日本語のソ系と同様、純粋な前方照応となる。このように日本語と韓国語の前方照応においては、コ系と이(i)系、ソ系と그(ku)系が、ほぼ対応している。[iv]

ところが、ア系と저(ce)系は、対応していない。

(5)　（ひとりごと）そう言えば、あれ、どこにしまったかなあ。
(5)’　그러고보니 그것 을 어디 에 치웠었 지.
(そう言えば　あれ　を どこ　に しまった か)

(5)’から、韓国語の記憶指示には、저(ce)系ではなく、그(ku)系を用いることが分かる。つまり韓国語の그(ku)系のカバーする範囲は、日本語のソ系とア系の両方に跨っているのである。[v]

[iv] 本稿では、ソ系とア系を考察対象とするので、コ系の詳細については触れない。

[v] 金(2006:108)では、「あの輝かしい百済の文化！」のような「百科事典的知識であり、具体的には歴史上有名な人物や文化遺産に関する知識」である対象のみ저(ce)系で指せる、と述べられている。そして、このような対象は「歴史的事実の観念指示領域」に属するという。日本語には「歴史的事実の観念指示領域」というカテゴリーは存在しない（歴史的事実であるか否かに関わらず、記憶内にある対象は「観念指示（記憶指示）」で指す）ので、本稿では、このような저(ce)系については触れない。

3.2. 中国語の指示詞

中国語の指示詞は、２系列である。

現場指示の距離区分型では、それぞれ［近］［遠］という素性を持ち、前者が「这」で、後者が「那」である。基本的には、話し手から［近］である対象は「这」系で指し、話し手から［遠］である対象は「那」系で指す。したがって、おおむねコ系＝「这」系、ソ系＋ア系＝「那」系というように対応している。

一方、人称区分型（仮称）においても基本的には［近］［遠］という原理が働いている。すなわち中国語では、基本的に話し手からの距離によって指示詞が選択される。聞き手の領域というものは（基本的には）優先されない。たとえ指示対象が聞き手の近くにあっても、それが話し手からも近いと認識されれば、遠称の「那」系ではなく、近称の「这」系で指す。

(6)　（聞き手の近くの「かばん」を指して）

日本語：<u>その</u> かばん、外国製でしょう？

中国語：<u>这</u>　包　　是　外国产 的 吧？

（この かばん です 外国製　の でしょう？）　--　張(2001)より

日本語では、聞き手の領域が優先されるので、聞き手の領域を表すソ系が選択される。一方、中国語では、話し手が指示対象を自身に近いと認識した場合、聞き手の領域は優先されず、近称の「这」系が選ばれる。[vi] [vii]

さらなる詳細については木村(1992)、張(2001)などを参照されたい。

次に、文脈指示について見てみたい。日本語では先行詞を指すとき、コ系とソ系が可能であるが、中国語では「这」系と「那」系が可能である。

(7)　我 有 一个 <u>朋友</u>　精神 压力　　很　　大。

（私 いる 一人 友だち 精神　ストレス とても 大きい）

<u>这个</u>／<u>那个</u> <u>朋友</u>　一 有　压力、　就　爬　公寓　　的 楼梯、

（この ／ その 友だち　　ある ストレス、 のぼる　アパート　の 階段、

爬 上　爬　　下 做　运动。

上る 上　下りる 下 する 運動）　（一～就～：～と～（条件文））

[vi] 人称区分型（仮称）の現場指示について、張(2001:5)では、日本語ではソ系で指すような対象であっても「中国語では距離が近ければそれを（引用者注；指で）指して、あるいは見ているだけでも…「这」を使ってよいのです」と解説されている。

[vii] その理由について、木村(1992)は以下のように説明している。

> “你”（あなた）の領域を“我（わたし）”の領域に取り込み、包み込んだ“咱们”（われわれ）の視点、言わば抱合的視点がとられた場合は、…聞き手に近い対象が（要するに話し手自身に近い対象として）“这”で示され、一方、“我”と“你”が自他的に意識された対立的視点がとられた場合は、…近距離の聞き手に属する対象であっても“那”で示される、ということである。（木村 1992:190）

本文の(6)の「这」は抱合的視点をとっているからである。対立的視点の場合の例は紙幅の都合で省略するが、抱合的視点が無標的で、対立的視点が有標的である。

コ系や「这」系の場合、直示的なニュアンスになる。一方、ソ系や「那」系の場合、直示的なニュアンスはなく、純粋な前方照応となる。

次に中国語の記憶指示であるが、記憶指示では「那」系が用いられる。

(8)　（ひとりごと）そう言えば、あれ、どこにしまったかなあ。

(8)'　对了、那个、我 放　哪里 来着。

（そうだ　あれ、 私 置く どこ （回想））

木村(1992)は、中国語の記憶指示について、次のように述べている。

(9)　日本語における記憶指示では、「その節」のような慣用句的なものを除けば、すべて遠称の「ア」が用いられるが、中国語でもやはり“那”が用いられる。（木村 1992:198）

以上、韓国語および中国語の指示詞の概要を見てきた。ここで、日韓中の指示詞の対応を、本稿での問題意識から整理すると、表１のようになる。

【表１】日韓中の指示詞の対応

	前方照応	記憶指示
日本語	ソ	ア
韓国語	ユ(ku)	
中国語	那	

韓国語も中国語も、前方照応と記憶指示の境界が、日本語のソ系とア系のようには明確に分離していない、ということが分かる。本稿は、両言語話者の「ソ⇔ア」の誤用の原因を、この観点から統一的に論じる。

4.　韓国語話者と中国語話者に対するアンケート

韓国語話者・中国語話者にとっては、前方照応と記憶指示の境界が曖昧なのではないか、という点を確認するため、以下のアンケートを実施した。

(10)　アンケートの概要

・回答者は韓国語話者 24 名、中国語話者 23 名（日本の大学の学部生）
・すべて日本語能力試験Ｎ１に合格している上級者
・文中に埋め込まれた（　）内から「その」か「あの」を選択
・Ａ～Ｅの５タイプの設問を用意し、それぞれ４問ずつ（a～p）提示
・設問は(a)～(p)の順番ではなく、アンケート用紙上、ランダムに配列

【表２】情報（指示対象）の属性によるＡ～Ｅタイプの分類

		話し手（自分）		聞き手（相手）	
		知っている	知らない	知っている	知らない
話し手（自分）	知っている	Ａタイプ（ひとりごと）	－	Ｂタイプ（共有知識）	Ｃタイプ（話し手が導入）
	知らない	－	－	Ｄ／Ｅタイプ（聞き手が導入）	－

Ａ～Ｅタイプは、その情報（指示対象）を話し手／聞き手が知っているか否か、という点から、表２のように整理される。ただしＤタイプは聞き手が導入した情報を１回目に指す場合、Ｅタイプは２回目に指す場合である。

4.1. Ａタイプ：ひとりごと（話し手が知っている情報を指す）

(a) え～と、３日前に買った（その／あの）本、どこに置いたかな。

【韓国：その＝４／あの＝20、83.3%】【中国：その＝２／あの＝21、91.3%】

(b) おっ、なつかしい。去年の忘年会の写真だ！（その／あの）時は楽しかったなあ。

【韓国：その＝５／あの＝19、79.2%】【中国：その＝６／あの＝17、73.9%】

(c) 昨日、図書館で会った（その／あの）人、確か山田さんっていう名前だったかな。

【韓国：その＝５／あの＝19、79.2%】【中国：その＝５／あの＝18、78.3%】

(d) 昨年の山田さんの結婚式の司会、（その／あの）司会は上手だったなあ。

【韓国：その＝７／あの＝17、70.8%】【中国：その＝７／あの＝16、69.6%】

（下線は正答の指示詞）【母語名：その＝回答数／あの＝回答数、正答率】

ひとりごとの記憶指示には、韓国語ではユ(ku)系、中国語では「那」系が用いられる。(a)～(d)で「あの」を選んだ回答者は記憶指示のア系を正しく理解していると見なせる。

一方、「その」を選んだ回答者は、一度は記憶指示のユ(ku)系、「那」系を思い浮かべたものの、それがソ系に対応するのか、ア系に対応するのか、で迷った結果、「その」を選んだのだと思われる。

また(d)では、前方に「司会」という名詞が登場する。(d)の誤用の原因としては、「司会」と前方照応すると考えた、という可能性も否定できない。[viii]

4.2. Ｂタイプ：共有知識を指す

(e) 山田：この間、一緒に行ったレストラン、おいしかったね。

鈴木：そうだね。（その／あの）レストラン、また一緒に行こうね。

【韓国：その＝６／あの＝18、75.0%】【中国：その＝８／あの＝15、65.2%】

(f) 山田：田中部長、また車を買い換えたんだって。

[viii] 迫田(2002)では(a)～(c)を「ア系観念用法」、(d)を「ア系文脈用法」と分類している。しかし本稿における「文法的整理」では、(a)～(d)のすべてを「記憶指示」と捉える。

鈴木：えっ、また！？（その／あの）人、お金に余裕あるんだね。

【韓国：その＝２／あの＝22、91.7%】【中国：その＝３／あの＝20、87.0%】

(g) 山田：昨日のクリスマスパーティ、楽しかったね。

鈴木：そうだね。（その／あの）パーティ、みんな盛り上がって、楽しかったね。

【韓国：その＝５／あの＝19、79.2%】【中国：その＝５／あの＝18、78.3%】

(h) 山田：今、全国で好評の映画『犬との漂流』、もう見た？

鈴木：あ、（その／あの）話題の映画だね。実は、まだ見てないんだけど…。面白かった？

【韓国：その＝３／あの＝21、87.5%】【中国：その＝２／あの＝21、91.3%】

第３章で確認したように、ひとりごとにおける記憶指示には、日本語ではア系、韓国語ではユ(ku)系、中国語では「那」系が用いられる。このことは話し手と聞き手との「共有知識」を指す場合にも同様であり、日韓中の指示詞の間に共通性が見られる。[ix]

しかし、Ｂタイプのアンケート結果から、ソ系を選ぶ回答者も一定数いることが分かる。対話の相手（山田）の発話に指示対象が登場するので、その名詞と前方照応すると捉えた学習者が「その」を選んだのだと思われる。

4.3. Ｃタイプ：話し手は知っているが、聞き手が知らない情報を指す

(i) 山田：私の友だちは、とてもストレスがたまっています。（その／あの）友だちは、ストレスがたまると、運動のために、アパートの階段を上ったり下りたりしています。

鈴木：どんなストレスがあるんですか。

【韓国：その＝19／あの＝５、79.2%】【中国：その＝21／あの＝２、91.3%】

(j) 山田：中学校のとき、絶対に自分の意見を曲げない性格のクラスメイトがいて、（その／あの）人は茨城弁で「頑固」を意味する「ごうじょっぱり」というあだ名で呼ばれていたんだ。

鈴木：どういうふうに「ごうじょっぱり」だったの？

【韓国：その＝18／あの＝６、75.0%】【中国：その＝15／あの＝８、65.2%】

[ix] 久野(1973)は、記憶指示（文脈指示）のア系について、以下のように述べている。

(i) アー系列。その代名詞の実世界における指示対象を、話し手、聞き手ともによく知っている場合のみに用いられる。（久野 1973:185）

これに対して、黒田(1979)は、ひとりごとを例に挙げて、実は当該の対象が話し手の記憶内にあれば、話し手と聞き手の共有知識でなくてもア系で指せる、としている。

（ii） 先週神田で火事があったが、あの火事で二人死んだのか。（黒田 1979:54、下線は引用者による）

それでは、なぜ次のようなア系は誤用となるのだろうか。

（iii） 私の友だちは、とてもストレスがたまっています。*あの友だちは、ストレスがたまると、運動のために、アパートの階段を上ったり下りたりしています。

それは、黒田(1979)によれば、聞き手（読み手）が「直接的知識の対象として」指せないからである。そのような場合には、聞き手の知識レベルに合わせ（以下、聞き手への配慮と呼ぶ）、概念だけで規定される対象として「その」で指さねばならない。

（iv） 僕は大阪では山田太郎という先生に教わったんだけど、君もあの先生につくと、きっと何とも言えないユーモラスな人柄に魅せられるよ。（黒田 1979:55、下線は引用者による）

では、共有知識ではない「先生」をア系で指しているが、これは聞き手への配慮を欠いた発話だからである。このようにア系は共有知識を指すとは必ずしも言えないのだが、(iv)のようなア系は、日本語学習者にとっての優先度が高くないと考え、本稿では触れない。

(k) 山田：先週、クリスマスパーティが開かれました。（その／あの）パーティでは、留学生たちがいろいろな出し物をして、とても楽しかったですよ。

鈴木：そう、よかったね！

【韓国：その＝19／あの＝５、79.2%】【中国：その＝19／あの＝４、82.6%】

(l) 山田：映画『犬との漂流』を、佐藤さんという人と一緒に見に行きました。（その／あの）人は、私の職場の同僚です。

鈴木：へえ。一緒に映画に行くなんて、仲が良いんだね。

【韓国：その＝19／あの＝５、79.2%】【中国：その＝14／あの＝９、60.9%】

このときの指示対象は話し手のみが知っていて、聞き手が知らない情報であって、共有知識ではない。したがって、聞き手への配慮から、ソ系の指示詞を選ばなければならない（注ix参照）。

しかし、上記のアンケート結果に見るように、「あの」を選ぶ回答者も一定数いる。なぜここで「あの」を選んでしまうのか。実はここには「共有知識とは何か」という問題が存在すると考えられる。つまり、どのような情報が「共有知識」なのか、日本語学習者は明確に了解していないのではないか。

日本語母語話者は、当該の会話が始まる前から話し手と聞き手が共有する情報を「共有知識」として捉えている。それを日本語教師は「当然、学習者も了解している」と考えているのではないだろうか。

しかし、韓国語・中国語では、前方照応と記憶指示が、ユ(ku)系、「那」系として形態的に同一なのである。したがって、両言語の話者には、先行詞が（日本語式の）「共有知識」であるのかどうかに注意する習慣がない。

そうであれば、日本語教育において、このようなルールを「暗黙の了解」とすることはできない。学習者は、前文脈に現れたということを以って当該情報を「共有知識」と捉えてしまう、という可能性があるのではないか。

日本語教育において重要なのは、その会話が始まる前から話し手と聞き手の双方に共有されている情報のみが「共有知識」であり、そうではない情報（前文脈に現れただけの情報）は「共有知識ではない」という、母語話者には当然すぎるゆえ気づかないルールを、あらためて説明することであろう。

そうでないと、当該の情報を聞き手が知らない場合、聞き手への配慮からソ系で指す、というストラテジーを身に付けられない。[x]

4.4. Ｄタイプ：相手が導入した情報を“１回目に”指す

4.5. Ｅタイプ：相手が導入した情報を“２回目以降に”指す

(m) 山田：私の友だちは、とてもストレスがたまっています。

鈴木：（その／あの）友だちは、ストレスをどうやって解消しているの？--(D)

山田：アパートの階段を上ったり下りたりしているんだって。

鈴木：へえ、（その／あの）友だち、いろいろ工夫してるんだね。--(E)

---

[x] 日本語では、話し手・聞き手の共有知識のマークは、談話の初期状態、つまり、話を始める前から互いに知っていると見なせる知識か、話の最中、現実に経験した知識にのみ付けられる。話の最中に得た間接、伝聞知識によっては、共有のマークは付けられない。（田窪 2010:259）

【韓国：その・その＝12／その・あの＝９／あの・あの＝０／あの・その＝３、50.0%】

【中国：その・その＝13／その・あの＝５／あの・あの＝１／あの・その＝４、56.5%】

(n) 山田：あーあ。浦和に気に入っている喫茶店があるんだけど、来月、閉店しちゃうんだって。

鈴木：へぇ、そうなんだ。残念だね。（その／あの）店、人気ないの？

山田：いや。人気はあるんだけど、オーナーが大阪に引っ越しちゃうんだ。

鈴木：そっか。ね、（その／あの）店、よかったら今月中に一回、連れて行ってよ。

【韓国：その・その＝９／その・あの＝８／あの・あの＝２／あの・その＝５、37.5%】

【中国：その・その＝５／その・あの＝11／あの・あの＝２／あの・その＝５、21.7%】

(o) 山田：昨日、クリスマスパーティへ行ってきました。

鈴木：（その／あの）パーティは、どんな様子でしたか。

山田：留学生たちがいろいろな出し物をして、とても盛り上がりました。

鈴木：へえ、（その／あの）パーティ、楽しかったでしょうね。

【韓国：その・その＝９／その・あの＝９／あの・あの＝２／あの・その＝４、37.5%】

【中国：その・その＝５／その・あの＝８／あの・あの＝２／あの・その＝８、21.7%】

(p) 山田：この間、『犬との漂流』という小説を読んだんだ。面白かったよ。

鈴木：へえ、（その／あの）小説、どんな内容なの？

山田：ひとことで言えば、人と犬との友情を描いた話だね。

鈴木：へえ、面白そう。私も（その／あの）小説、読んでみよう。

【韓国：その・その＝14／その・あの＝５／あの・あの＝２／あの・その＝３、58.3%】

【中国：その・その＝８／その・あの＝９／あの・あの＝２／あの・その＝４、34.8%】

Ｄタイプ（１回目）の指示対象は、話し手（鈴木）にとって初めて接する情報であるから、記憶指示のア系では指せない。Ｂタイプ（共有知識）との違いを理解している回答者が、「その」を選べたものと思われる（「あの」を選んだ回答者は少ない）。

Ｅタイプ（２回目）の指示対象も、前文脈に出てきているものの、ア系では指せない。日本語では、当該の会話中に文脈から得た情報は「共有知識」として指せないからである（注ｘ参照）。

一方、中国語話者および韓国語話者の場合は、以下の２つの理由によって指示対象を「共有知識」と捉える可能性があることを否定できない。

(11-1) 会話において、指示対象が話題となり続けていること。

(11-2) 相手（山田）が導入した情報ではあるが、話し手（鈴木）も１回その情報を指していること。

このような要因により、２回目に指す時点において、それが「共有知識」であると捉えてしまう可能性がある。このことが、１回目で正しく「その」を選べても、２回目で「あの」を選んでしまう回答者が多い理由であろう。

5. 「共有知識とは何か」を中心にした「解説」

以上で見てきたように、「共有知識とは何か」ということを、きちんと理解していないと、「ソ→ア」「ア→ソ」のいずれの誤用も起こり得るということが分かる。またここには、このことを教師の側がしっかりと説明していないのではないだろうか、という技術的な問題もありそうである。[xi]

そこで筆者は、以下に紹介する「解説」を作成して、１回目のアンケートの翌週（次回の授業時）に、「解説」を行った後、２回目のアンケートを実施した。１回目と２回目のアンケートは同一のものだが、１回目のアンケートについては、答え合わせも返却もしていない。「解説」後のアンケート（２回目）の結果、すべてのタイプ（設問）において、正答率が上昇した。[xii]

【指示詞「その」「あの」のアンケートの解説】
－「その」「あの」の使い分けの４つのルール－

Ⅰ．ひとりごとでは、自分が知っている対象は、「あの～」で指します。
（ひとりごとに出てくる対象は、基本的に、自分が知っているものです）

（例）昨年の山田さんの結婚式の司会、（その／あの）司会は上手だったなあ。

・話し手は「司会」の人を自分で見ましたから、対象（＝司会）を知っています。ひとりごとでは、自分が知っている対象は、「あの～」で指します。

Ⅱ．自分と相手の両方が知っている対象は、「あの～」で指します。

（例）山田：この間、一緒に行ったレストラン、おいしかったね。
　　鈴木：そうだね。（その／あの）レストラン、また一緒に行こうね。

・山田と鈴木は一緒に「レストラン」に行きました。だから、山田と鈴木の両方とも「レストラン」を知っています。両方が知っている対象は、「あの～」で指します。

[xi] 庵(2012)では、34 冊の日本語教科書を調査して、
・話し手と聞き手がともに直接知っているものはアで指し、そうでないものはソで指す。
・文章における文脈指示ではアは使われない。
上記２点「を満たす形での、明示的で包括的な記述を行っているのは」４冊のみである、という。このことから、指示詞の使用を明示的に説明した教科書が少ないことが分かる。

[xii] この「解説」は何度かの予備実験を行って、その度に作り直したものである。小規模の人数に対して「１回目のアンケート→解説→２回目のアンケート」を行って、各タイプにおいて正答率が上がらない（または下がる）場合には、それは「解説」が良くないという証拠であるから、その点を改良する、という作業を重ねていき、最終版を作り上げた。

Ⅲ．自分が知っていても、相手が知らない対象は、「その～」で指します。

（例）山田：映画『犬との漂流』を、佐藤さんという人と一緒に見に行きました。（その／あの）人は、私の職場の同僚です。
鈴木：へえ。一緒に映画に行くなんて、仲が良いんだね。

1）山田は「佐藤さん」を知っていますが、鈴木は「佐藤さん」を知らないです。このとき、山田は鈴木の立場に立って、「佐藤さん」を「その～」で指します。
2）山田は、前文で「佐藤さん」のことを言っていますが、それだけでは、鈴木にとって「佐藤さん」は知っている対象にはなりません。だから、山田は「佐藤さん」を「その～」で指します。

Ⅳ．相手が言った対象を、自分が知らないときは、「その～」で指します。

（例）山田：あーあ。浦和に気に入っている喫茶店があるんだけど、来月、閉店しちゃうんだって。
鈴木：へぇ、そうなんだ。残念だね。（その／あの）店、人気ないの？
山田：いや。人気はあるんだけど、オーナーが大阪に引っ越しちゃうんだ。
鈴木：そっか。ね、（その／あの）店、よかったら今月中に一回、連れて行ってよ。

1）山田は「喫茶店」を知っていますが、鈴木は「喫茶店」を知らないです。だから、鈴木は「あの～」を使えません。知らない対象は、「その～」で指します。
2）山田は「喫茶店」の説明をしますが、それだけでは、鈴木にとって「喫茶店」は知っている対象にはなりません。だから、鈴木は「喫茶店」を「その～」で指します。
3）会話中に、何回「喫茶店」が出てきても、鈴木にとって「喫茶店」は知っている対象にはなりません。だから鈴木は、２回目（以降）に「喫茶店」を指すときも、「その～」で指します。

上記の「解説」を配布して、丁寧に噛み砕いて説明した後、２回目のアンケートを実施した（解説で例示した設問も、そのまま提示した。なお２回目のアンケートに回答する際には、「解説」は見ないように指示した）。

【表３】１回目と２回目のアンケート結果の比較 [xiii]

		韓国語話者（24 名）				中国語話者（23 名）				両言語話者の合計（47 名）			
		１回目		２回目		１回目		２回目		１回目		２回目	
		正答数	正答率	正答数	正答率	正答数	正答率	正答数	正答率	正答数	正答率	正答数	正答率
A	a	20	83.3%	22	91.7%	21	91.3%	22	95.7%	41	87.2%	44	93.6%
	b	19	79.2%	21	87.5%	17	73.9%	23	100.0%	36	76.6%	44	93.6%
	c	19	79.2%	22	91.7%	18	78.3%	23	100.0%	37	78.7%	45	95.7%
	d	17	70.8%	21	87.5%	16	69.6%	22	95.7%	33	70.2%	43	91.5%
B	e	18	75.0%	21	87.5%	15	65.2%	21	91.3%	33	70.2%	42	89.4%
	f	22	91.7%	23	95.8%	20	87.0%	22	95.7%	42	89.4%	45	95.7%
	g	19	79.2%	22	91.7%	18	78.3%	22	95.7%	37	78.7%	44	93.6%
	h	21	87.5%	22	91.7%	21	91.3%	21	91.3%	42	89.4%	43	91.5%
C	i	19	79.2%	24	100.0%	21	91.3%	23	100.0%	40	85.1%	47	100.0%
	j	18	75.0%	23	95.8%	15	65.2%	23	100.0%	33	70.2%	46	97.9%
	k	19	79.2%	23	95.8%	19	82.6%	23	100.0%	38	80.9%	46	97.9%
	l	19	79.2%	22	91.7%	14	60.9%	22	95.7%	33	70.2%	44	93.6%
D／E	m	12	50.0%	20	83.3%	13	56.5%	22	95.7%	25	53.2%	42	89.4%
	n	9	37.5%	20	83.3%	5	21.7%	22	95.7%	14	29.8%	42	89.4%
	o	9	37.5%	20	83.3%	5	21.7%	21	91.3%	14	29.8%	41	87.2%
	p	14	58.3%	21	87.5%	8	34.8%	21	91.3%	22	46.8%	42	89.4%

このような「解説」を提示すれば、学習者にとっては、日本語の指示詞の使用における「共有知識」とは何か、ということへの理解が深まるだろう。そして「共有知識」への理解が深まることにより、このタイプの「ソ⇔ア」の誤用が減少することが、表３から見てとれる。

6. まとめ

本稿の結論は、以下のようにまとめられる。

(12-1) 韓国語話者と中国語話者による指示詞「ソ⇔ア」の誤用は、両言語で前方照応と記憶指示の形態が同一（韓国語はユ(ku)系、中国語は「那」系）であることが、その原因の１つである。

(12-2) しかしながら、これまで日本語教育では、この（前方照応と記憶指示の）差異をしっかり提示してこなかったのではないだろうか。本稿の実験で示したように、適切な「解説」を提示すれば、このタイプの「ソ⇔ア」の誤用は、かなり高い割合で防ぐことができる。

[xiii] 両言語話者の合計に対してカイ２乗検定を行った。網掛けは５％水準で１回目と２回目の正答数に有意差が出た設問を表す。つまり、(a)(f)(h)(i)以外では有意差が得られた。ただし(a)(f)(h)(i)では、１回目の正答率も高い。

日本語のソ系とア系の使用条件に対する境界の曖昧さをめぐり、その原因（母語からの転移）と、対処法（どのように「解説」すれば誤用を防げるか）について、本稿では（特に「共有知識」の理解を中心に）考察を行った。

２回目のアンケートでは比較的よい結果が得られたが、これは「解説」の直後に実施されたこと、例示した文も設問に入っていたこと、などの要因も否定はできないだろう。しかしながら、このような「解説」をすること自体が有効であることは、示せたものと思われる。

参考文献

1. 安龍洙(1996)「韓国人学習者の指示詞「コ・ソ・ア」の習得における母語の影響について－非現場指示の場合－」『東北大学文学部日本語学科論集』第 6 号，pp.1-12
2. 庵功雄(2012)「新しい文法教育のパラダイム構築のための予備的考察」『日中言語研究と日本語教育』5，pp.37-45
3. 金井勇人，金善花，ジョセッププラウィタ(2011)「日本語と諸言語の指示語の対照について－インドネシア語・韓国語・中国語と－」『埼玉大学国際交流センター』5，pp.17-34
4. 木村英樹(1992)「中国語指示詞の「遠近」対立について－「コソア」との対照を兼ねて」『日本語と中国語の対照研究論文集（上)』pp.181-211，くろしお出版
5. 金水敏(1999)「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』6-4，pp.67-91，言語処理学会
6. 金善美(2006)『韓国語と日本語の指示詞の直示用法と非直示用法』風間書房
7. 久野暲(1973)『日本文法研究』大修館書店
8. 黒田成幸(1979)「(コ)・ソ・アについて」『林栄一教授還暦記念論文集・英語と日本語と』pp.41-59，くろしお出版
9. 迫田久美子(1998)『中間言語研究－日本語学習者による指示詞コ・ソ・アの習得』渓水社
10. 迫田久美子(2002)『日本語教育に生かす第二言語習得研究』アルク
11. 迫田久美子(2011)「日本語学習者の話し言葉における指示詞習得」『2011 年度 日本語教育学会秋季大会予稿集』pp.27-30
12. 田窪行則(2010)『日本語の構造－推論と知識管理』くろしお出版
13. 張麟声(2001)『日本語教育のための誤用分析－中国語話者の母語干渉 20 例』スリーエーネットワーク